

## 『金剛手灌頂タントラ』における

### 「真言門において菩薩行を修する菩薩」

伊藤 堯 貫

はじめに

チベット訳に伝わる『金剛手灌頂タントラ』(Tib. No. 496)は、プトンのタントラの四分類(所作タントラ、行タントラ、瑜伽タントラ、無上瑜伽タントラ)によれば、『大日経』と共に行タントラに配される文献である。<sup>(1)</sup>

この『金剛手灌頂タントラ』は、さまざまな仏、菩薩、忿怒尊、天部の真言と、その成就法が説かれる。その成就法の多くは、ある真言を誦えることによってさまざまな除災招福を目的として、説かれており、その意味では、初期密教の色彩を色濃く持つ文献である。

しかしながら、一方、このような真言という法門は、まさしく仏によって説かれたものであり、大乘であることを主張する文献である。

さて、ともに同じ行タントラに配される『金剛手灌頂タントラ』と『大日経』には、真言行者の呼称として、「真言門において菩薩行を修する菩薩」という述語がしばしば使われる。<sup>(2)</sup> また、この呼称は、後期密教においても使用され

ていた。<sup>(3)</sup>

この呼称は、次のように、

【金剛手灌頂タントラ】

“byañ chub sens dpa'i spyad pa gsañ śhags kyi sgo spyod pa'i byañ chub sens dpa' mams”

蔵訳【大日経】

“byañ chub sens dpa' gsañ śhags kyi sgo nas byañ chub sens dpa'i spyad pa spyod pa”

漢訳【大日経】

「於真言門修菩薩行菩薩」

と記述されている。

この論文では、このように呼ばれる菩薩はどのような意味を持つのかを、『金剛手灌頂タントラ』を中心に考察してみた。

一、『金剛手灌頂タントラ』における金剛手灌頂について

【金剛手灌頂タントラ】には、

「世尊釈迦牟尼はまた、教説を絶やさないために、……大金剛曼荼羅を描き、

金剛手灌頂によって普賢菩薩を灌頂して、そこでまさに教説を付属した」<sup>(4)</sup>

と述べられているように、この金剛手灌頂は、釈迦牟尼如来の教説の存続の為に行われた。では、この教説とは何を意味するのか。さらにこの金剛手灌頂について検討してみたい。

この灌頂が行われた場所は、「吉祥功德生大城の種々の幢を莊嚴する沙羅樹の深い林<sup>(5)</sup>」である。この場所は、釈尊入滅の地である、クシナガラの沙羅双樹を想起させる。

また、「金剛手灌頂品」には、

「金剛手灌頂という曼荼羅があり、世尊は、それを、ただ私の為だけに説いた。大般涅槃の時、教説と秘密の中の秘密、最勝大秘密であり、一切の声聞と縁覚もまたよく知らないことを、他の世間の人々は言うまでもなく、この最勝秘密をまた私に付嘱した。寂慧よ。最も大秘密なる曼荼羅は何であるかと言えは、金剛手灌頂と呼ばれる。これによって、衆生と非衆生のすべてを満たし、寂慧よ。これによって、仏国もまた、満たされないことはない<sup>(6)</sup>」。

と述べており、釈迦が大般涅槃の時に、その秘密の教説が、開示されたとあり、この灌頂の行われた「吉祥功德生大城の種々の幢を莊嚴する沙羅樹の深い林」は、クシナガラの沙羅双樹を意味していると考えられる。

つまり、この場所が、クシナガラの沙羅双樹を意味しているのであれば、この灌頂は、釈迦牟尼如来が入滅する最後に、今まで開示されることがなかった秘密の教説を、普賢菩薩へ付嘱したと解釈することができる。

また、一方、この「吉祥功德生大城の種々の幢を莊嚴する沙羅樹の深い林」という名称は、『華嚴經』「入法界品」で、文殊菩薩と善財童子が出会う場所である「福生城の東の莊嚴幢娑羅林<sup>(7)</sup>」も想起させる。

もし、この名称が、『華嚴經』「入法界品」で説かれる「福生城の東の莊嚴幢娑羅林」を意味しているのであれば、『金剛手灌頂タントラ』は、「入法界品」では説かれることがなかった別の秘密の法門を、普賢菩薩が授かったと解釈することもできる。

さて、この「吉祥功德生大城の種々の幢を莊嚴する沙羅樹の深い林」に、普賢菩薩は夜叉をともなってやって来

る。そして、釈迦牟尼如来は、「種々の幢を莊嚴する沙羅樹の深い林」を、金剛の自性を持つものとして加持して、頭から一切無礙力光明を発す。その光明を頭頂に受けて普賢菩薩は無礙力真言を誦える。そして、釈迦牟尼如来をはじめとする一切如来は、普賢菩薩に金剛杵を授与するのである。この金剛杵を授与する場面は、次のように説かれている。

「その時、無礙力金剛の心真言を唱える直ちに、それらの如来は、三昧・陀羅尼・〔十〕力・〔七〕覺支・〔八〕聖〔道〕・〔四〕聖締・空性・〔十八〕不共仏法・大空性の辺際から所作を布施すること・禁戒・忍辱等の六波羅蜜によって生じた形を持つ金剛杵を加持して、普賢菩薩の手に授けた」。

このように普賢菩薩は、三昧・陀羅尼・十力・七覺支・八聖道・四聖締・空性・十八不共仏法・布施・律・禁戒・六波羅蜜という仏陀の功德であり、かつ仏陀となるための行を意味していると考えられる金剛杵を授与される。この金剛杵を授与されたことによって、普賢菩薩は金剛を持つ者、すなわち金剛手と呼ばれる。

「それらの如来は、この三昧耶を加持して、また、秘密金剛というこの真言を唱えた。

*namh sarvatathāgātebhyah sarvamukhebhyah sarvathā gūhyavajrahara svāhā /*

その時、秘密金剛の心真言を唱えると直ちに、一切の廣大世界と、一切の仏の大集会において、『秘密主よ』という語を相統して唱えよ」と述べ、即ち、この真言の力と、一切如来の加持力によって、金剛手菩薩を、一切如来の円満な心と智に、明らかに入れた<sup>(9)</sup>。

と述べられている。ここに、普賢菩薩に授与された金剛杵が、秘密であり、その秘密の金剛杵を持つが故に、秘密主と呼ばれることが示されている。ここで秘密と述べられているのは、秘密の教説すなわち真言門の意味であると考えられる。

何故ならば、この金剛杵の授与の後に、普賢菩薩には、一切の心真言が授与され、また、一切の教説の利益と守護を許可し、過去の大誓願を円満したことが述べられているからである (Tōh. No. 496, rgyud hbum, da. 30 a)。

この金剛手灌頂によって授けられる金剛杵は、「仏陀の功德であり、かつ成仏するための六波羅蜜などの行」と「秘密の教説である真言門」という二つの意味を持っていると考えられる。これは、大乘仏教の目的である無上正等覺を達成するためには波羅蜜行という菩薩行によって功德を積重する必要があるが、その功德の積重は、真言を念誦するという菩薩行によって可能であり、それによって無上正等覺を達成することができることを意味していると考えられる。

## 二、「金剛手灌頂タントラ」における真言と大乘

次に「金剛手灌頂タントラ」では、真言と大乘の関係についてどのように説かれているかを検討してみたい。まず、大乘については、次のように述べられている。

「大乘に入ることと、大乘に入る処を説こう。

善男子よ。ここに、大乘と言われるこれは、不可思議法性の異名である。

その入ることは、菩提である。

善男子よ。処というこれは、根本である。それは又、大悲が先行であり、一切衆生を調伏して、摂受して、場所と時間の力によって、その相を示すことである。

善男子よ。復次に、大乘には二種ある。有為によって開示することと、無為によって開示することである。ここに、有為によって開示することが行の自性であり、無為によって開示した大乘性が大乘である。

善男子よ。復次に、有為は、因より生じたものであり、縁起の相である。

善男子よ。無為は、不生の法性であり、空性が自性である。

善男子よ。復次に、行の自性の大乘とは何か。空性を証得して、如来・応共・正遍知たちの場所と時間の力によって、衆生を調伏して、摂受して、所作と行為によって遍なく生起する理趣が施設されることである。

善男子よ。これが行の自性の大乘である。

善男子よ。ここに、無為の大乘性とは何か。即ち、実の如く住する法性の異名である。

善男子よ。実の如く住する法性と言われるこれは、不可思議法性の異名である<sup>(10)</sup>。

ここでは、大乘に有為と無為の二種類があり、

有為は行・縁起の相・衆生を救うための理趣の施設

無為は空性・実の如く住する法性・不可思議法性

と、述べられている。つまり、無為なる空性を証得するには、有為である行によらなければならない。また、この行は、空性を証得した如来によって施設された道であると述べているのである。

では、ここで説かれる行とは、何か。それが「真言門」であることが次のように説かれている。

「真言行は大智であり、大乘の最勝位である。そこにおいて、一切智性と一切の義を成就する行を獲得して、真言行から生ずる、大乘の一切智を、過去の正等覚者たちは、この最勝の林で、常に説法する。沙羅樹の幢は大いに心地よく、行を開示する処であり、過去に行から生じたのであり、真言を知るが故に生じたと言われる。あらゆる過去の正等覚者と、このようなあらゆる未来の者たちと、守護者であり、現在に生じた、尊師として住するものたち、彼ら一切は、ここに行って、真言行から生じた大乘によってこの灌頂を、善逝子によく授けた<sup>(11)</sup>」。

ここでは、真言行によって、一切智を成就できることが説かれている。

### 三、「真言門において菩薩行を修する菩薩」

さて、この「真言門において菩薩行を修する菩薩」という呼称には、次のように二つのことが意味されているとま  
とめることができるだろう。

一、我々は、菩薩であり、目指すのは如来の覚り、すなわち無上正等覚であり、一切智である。

二、そのため、通常の菩薩行（波羅蜜行）とは異なる真言門による菩薩行によって、無上正等覚を達成する。  
つまり、顕教の菩薩も、真言門によって菩薩行を修する菩薩も、ともに無上正等覚を目指すことには変わりない  
が、真言を念誦するという修行法によって成仏することが可能であると考えた人々が、自らのことを「真言門におい  
て菩薩行を修する菩薩」と呼び、彼らによって、『大日経』や『金剛手灌頂タントラ』が伝持されてきたのであろう。

(1) “Gyud sde spyi’ni mam par gshag pa ; rgyud sde rin  
po che’i mdzes rgyan shes bya da” 『総タントラ部解  
説』タントラ部なる宗の妙敵とていう書

(The Collected Works of Bu-ston, ed. Lokesh Chan-  
dra, New Delhi, 1969 ; Part 15, fol. 237~241?)

(2) 「真言門において菩薩行を修する菩薩」という語は、『金  
剛手灌頂タントラ』に38回説かれてくるが、他にも『大日  
経』に36回、『不動儀軌』(Toh. No. 495)に二回説かれ  
ていることが、酒井真典博士と指摘されている。酒井真典

『修訂大日経の成立に関する研究』国書刊行会、昭和37年。  
p. 151~153

(3) 生井智紹「真言門より行を行する菩薩——大乘仏教におけ  
る密教の形成過程という観点から——」『高野山大学創立百  
十周年記念 高野山大学論文集』高野山大学創立百周年  
記念論文集委員会 平成八年

(4) bcom ldan rdas sa kya thub pa de yan batsn pa  
rgyun mi hchad pshi phir / .....rdo rje’hi dkil hkhol  
chen po bris nas / lag na rdo rje dbah chen po bskur

bas byañ chub sems dpañ kun tu bzat po dhan bskur  
nas de ñid la bstan pa grad do //(Toh. No. 496, rgyud  
ñbum, da, 11 a)

(㊦) groñ kher chen po dpal yon tan ñbyuñ gnas na ñin  
sā la sna tshogs kyi rgyal mtshan bkod pañi nags tshal  
stug po / sñigunākarahānagare vicitrasāradhvajavyūh-  
avanaṣaṅde \*(Toh. No. 496, rgyud ñbum, da, 11a)

(㊧) rdo rjes dhan bskur ba shes bya bañi dkyil ñkhor  
yod de / bcom ñdan ñdas kyois de kho bo gciḡ bu la  
bsad do // yoñs su mya ñan las ñdas pa chen pohi  
tshē / bstan pa dañ gsañ bañi yañ ches gsañ ba / gsañ  
chen dam pa / ñan thos dañ rañ sañs rgyas thams cad  
dkyois kyañ mam par mi riḡ na / gshan ñjiḡ rten pa  
rnamś kyois ña smos kyañ ci dgos pa gsañ ba dam  
pa ñdi yañ kho bo la grad de / shi bañi blo gros  
mchog tu gsañ ba chen pohi dkyil ñkhor gañ she na  
ñdi ñta ste / rdo rjes dhan bskur ba shes byaḡo // ñdis  
rgyu ba dañ mi rgyu ba dañ bcas pa ma lus pa ñdi  
mthañ dag khyab ste / shi bañi blo gros ñdis sañs  
rgyas kyois shin yañ ma khyab pa med do //(Toh.  
No. 496, rgyud ñbum, da, 103b)

(㊨) Sk., dhanyākaraśya mahānagarāśya pūrvena vicitra-  
sāradhvajavyūhañ nāma mahāvanaṣaṅdañ (Vaidya

ed. Buddhist Sanskrit Text No. 5, Gaṇḍavyūhaśūtra)  
Tid, groñ rdal chen po skyid pañi ñbyuñ gnas kyi sar  
phyogs logs na nags tshal chen po sā la sna tshogs  
kyi rgyal mtshan gyi rgyan ches bya ba (Toh. No.  
44, Phal po che, ga, 317 b~318 a)

Ch., 附釋并釋° 念其繁鍊° 世共驚聽繁鍊未甘° (T四〇辨  
藏】大目° No. 293, p. 677, C)

(㊩) de nas thogs pa med pañi stobs rdo rjeñi sñin po  
smaś ma thag tu de bshin gśeḡs pa de dag gis tiñ ñe  
ñdsin dan / gzunts dan / stobs dan / byañ chub kyi yan  
lag dan / lam dan ñphags pañi بدن pa dan stot pa  
dan sañs rgyas kyi chos ma ñdres pa dan / stot pa  
ñid chen pohi mthañ las byas pa sbyin pa dan / dal  
ba dan yan dag par sdom pa dan / des pa la sogs pa  
pha rol tu phin pa drug gis nam par bskyed pañi gzugs  
can gyi rdo rje byin gyis brlabs te byañ chub sems  
dpañ kun tu bzat pohi lag tu byin no //(Toh. No.  
496, rgyud ñbum, da, 25 b)

(㊪) de bshin gśeḡs ps de dag gis dam tshig ñdi byin gyis  
brlabs nas yañ gsañ bañi rdo rje shes bya bañi sñin  
po ñdi gsuñs pa / na mañ sa rba ta thā ga te bhyañ  
sa rba mu khe bhyañ sa rba thā gu hya ba jra dha ra  
svā hā // de nas gsañ bañi rdo rjeñi sñin po gsuñs



ma thag tu hñig rten gyi khams rab hbyam thams cad  
dah sants rgyas kyi hñkhol kyi dkyil hñkhol thams cad  
du gsañ bahi bdag po gsañ bahi bdag po shes sgra  
gcig nas gcig tu hur shes grags nas hdi sta ste / snin  
po hdi mthu dañ de bshin gśeags pa thams cad kyi  
byin gyis brlabs kyi stobs kyiś byañ chub sems dpalñ  
lag na rdo rje la de bshin gśeags pa thams cad kyi  
thugs dañ ye śes phun sum tshogs pa dag mñon sum  
de shugs so //(Toh. No. 496, rgyud hñbum, da, 26 a)

(10) Toh. No. 496, da, 21 b~22 a

(11) Toh. No. 496, da, 24 b~25 a